

大学放浪記 (31)

伊藤信孝

マエジョ大学客員教授・再生可能エネルギー学部

本報では久しぶりに対面講義の機会を得た喜びを伝えたく、報告する。2019年の12月末に日本に一時帰国して、翌年1月7日に再度タイに戻ってきてから COVID-19 が急激に深刻となり、それ以来、2年7ヶ月ほどタイの国内に足止めされ、働き場所もチェンマイ大学からコンケン大学に移籍し、1年間の滞在を終えて2021年10月初めからマエジョ大学にお世話になっている。しかしコロナ禍の状況はよくなるどころか、姿を変異株として変えて益々猛威を振りつつある。3回のワクチン接種を済ませ感染しないための防備だけは万全を期すべく対応してきた。しかし徐々に状況は改善したかに見えてきても、「禍は忘れた頃にやってくる」が如く、再三再四頭をもたげてくる。国に依って状況は多少異なるが日本では毎日万単位で感染者数が増大しつつある。毎日の感染者数の報告にも彰江ムードさえ漂っている。毎日なされる感染者数報告の意味について疑問を抱く人も多い。また雰囲気的には普通のインフルエンザと同じ感覚で、ウイルスとの共存を受け入れるが如き感覚になりつつある。しかし、死者が出ている事実から。いつ何時に感染し、死に追いやられるかも知れないので、予断を許さないところに注意を忘れてはならないことは当然である。

さて、これまでコンケン大学に1年お世話になったが、講義は3回学部、大学院の学生むけにオンラインで5回ほど、またスペインでの国際学会とタイ国内でのタイ農業工学会の国際背各界でそれぞれ1度と全ての講義講演はオンラインでのものであり、対面講義は全く無かった。マエジョ大学に移ってからも移籍後の当初の身分(現地での受け入れ身分)が一時的にプロジェクトでの雇用と言うことで講義はなし、再生可能エネルギーでの新しい雇用が確定したあとも3回ほど院生向けに講義はそれぞれ1回5時間のオンライン講義は消化したものの、対面講義は全く無くいたずらに時間だけが過ぎていくかの如き毎日が過ぎた。しかし新しい学期の始まりになっても、どうした訳か一向に情報は入らず少しばかり牛木に思っている時に、大学のインターナショナル・カレッジ (International College) で、特別講義をやってくれとの。急な話が持ち上がった。話が決まったのが木曜日の夜で、講義実姉がその週明けの月曜日ということで、余りにも唐突な話ではあったが、非常に嬉しく快諾したが、公的な招聘状を学部長から送付するので月曜日が同じ週の金曜日と変わった。聴講学生の背景、即ち何を専門とする学生なのか、また何年生なのかも分からぬままに待っていると招聘状が届き、講義タイトルと日時、場所が提示してあった。タイトルは「日本に於ける農業と農業研究者」で **Agriculture and Agriculturist in Japan** であった。依頼されて引き受ける限りは、全力を尽くすというのが筆者の信条で有り、残りの千分の1秒まで頑張るって良き内容の講義をするという気持ちに背く行動はとれない。パワーポイ

ントのスライドも新しく作るということで、連日殆ど眠ることなく準備に没頭した。水員時間はほぼ2時間から4時間で、精神的にも充実した1週間であった・コロナ禍発生以来2年半ぶりの対面講義ができる嬉しさにエキサイトもしていた。1時間で消化するパワーポイントのスライド枚数は内容にも依るが、これまでの経験から約50枚程度と認識している。与えられた時間は2時間午後13時から15時であるから、100枚程度のスライド準備が必要である。また授業の進行の都合で、きっかりとその様に運ぶことはない。時間が足りないときはスライドの用意した枚数を消化できていないことであり、逆に時間が余るときはすでに用意したスライドを全て説明し消化したことになる。後者の場合、残りの時間を以下に消化するかということで、話す話題がないと恥ずかしい思いを為なければ成らない。極力そうした授業の展開は避けたい。と言うわけでいつもスライドは多めに準備して授業に臨む姿勢を堅持している。そしてその日が来た。落ち着かぬ気持ちで1時間前に講義場所であるインターナショナル・カレッジに出向き、部屋の確認、機器の接続、機器の動作確認を済ませ30分の余裕を持った対応となった。スタッフの話では聴講学生の総数は30名弱、うち一人は都合で大学には来れないがオンラインで参加という事である。そして余裕を持って授業開始時間を待った。そしてその時が来た。開始予定時間の13時きっかりに、「今から講義を始めるが、全員この部屋にいるか？」と確認し、未だ教室に入っていない男子生徒数名に早く入室し、席に着くよう指示して講義を始めた。最初は筆者の時間を10分程度行い本題に入った。聴講学生の専門を聞いてみると「中国語」を専攻しているという。筆者自身の自己紹介のときに筆者が自分の専攻が農業工学で有り、学部、修士、博士課程を経て大学の先生になった。そして今貴方方の前にいると言うと学部(BS)、修士(MS)の意味が分からない。もちろん Ph.D. の意味も分からない。聴講学生は学部生であり、外国語学習を専門とするから「貴方達の専門は社会科学(文系)で有り、私の専門は理系であるから、学部は(BS, Bachelor of Science)、修士(MS, Master of Science)と言う。あなたたちが学部を卒業するときは BA, Bachelor of Art, 修士を終えるときは Master of Arts の称号をもらう。博士課程では文系も理系も同じで双方共に Ph.D. であるがそれだけでは専門が分からないから、あとに専門分野を付ける。私の場合は Ph.D. in Agricultural Engineering とするのが正式な表現である。博士号称号は他にも Doctor of Agriculture とか、これに類する学位があるが、論文審査のみで取得した学位はこのような形になる・Ph.D. は課程博士と善い、博士課程に在籍して取得していることが条件になる。

この例からも分かるようにちょっとしたことでも余分な説明が必要になる。筆者は祖の説明二時間を割くことはいとわれないが、そうすると本来の話題に沿った説明の時間が少なくなる。そこそこにして授業進行をせねば成らない。また上記の要請されたトピックを文系の彼らがどこまで興味を持って機器、理解のレベルまで辿り着いたであろうかは疑問である。加えて英語もどれほど理解できるかもあまり期待できない。IT機器の発達と普及でスマート・フォーンは理系文系、年齢、性別を問わず、殆ど誰もが個人的に所有し、日常生活においても必需品になりつつある。大学の講義においても筆記用具を持参する学生は

殆どいない。授業中もスマホを操作し、教員が話す内容には余り関心が無いようである。では重要と思うことはどうするのかと言うとスマホのカメラで撮影して自らメモを取ることではないと言っても過言では無い。カメラで撮ってその後それをどの様に取り扱うのかと言う所が興味あるところである。いくらかの学生は声を出してはなしもしているか、思うと前方に位置する席にいても居眠りをする学生もいる。筆者は他の教員とは異なり、話をしている学生には話をやめるよう注意し、眠っている学生には起きよう注意する。これには少々驚いて居る学生も見られた、ということはこうした行為にあまり注意をする教員が少ないのでは無いかと推察する。居眠りをする者がでると言うことは、講義内容に興味が無いのか、英語が分からないか、あるいは肉体的に披露しているのか、その原因は定科ではない。しかしそのまま放置して居置くのは解決にならない。またあの

先生の講義は寝ていても何も言われることはないという間違ったメッセージを学生に発信することになる。これほど情報が溢れ、また欲しい情報の大半が作座に入手できる事が可能な情報化時代という環境のもとで、なぜ大学に来て教員が提供する講義に出生し、内容を学び、修得する意味は何かと考えるとその意義は簡単明瞭である。教育テレビの場合を比較に出せば一目瞭然である。同じタイトルの講義でも授業をする教員によって興味、理解の程度は異なる。講義をする能力、方法、にもよるが、根本的に教員の有する豊富なキャリア、知識の量、経験の多さ、判断力、永年にわたり蓄積して来た総合的な知識経験から作り上げられた教員自身の哲学がその明暗を分ける。オンラインでは質疑応答などで双方向の接触ができると言うが、対面講義に於いて相手を知り、教員を人として理解できると言うことは教育テレビでは及ばない。授業中に居眠りする学生が出る原因は上記したが教える側からすれば、できるだけそうした学生が出ないように努力する必要がある。そこでときどき英語での慈雨団を交えて眠気を覚ますと同時に、そのジョークをどの程度理解できるかと言う英語力を確かめる機会にもなると言うことで時々こうした事を試みる。その日も2つほどわかりやすいジョークを紹介したが、本当にジョークの「笑点（笑いのポイント）」を理解したと思われる学生はわずか2～3名と判断した。しかし、分からなければ聴く側が悪い、自分の責任ではない、と突き放し、放置するほど無責任(?)な行動はとれない。講義の終わりには講義で使用したPPT資料を学生に配布し、勉強して欲しいと願っている。彼らがどの程度それらを用いて自習するかは知り得ないが。

とにかく長期に亘り講義を売る機会が無く久方ぶりの対面講義にエキサイトし、殆ど根元に資料を用意し、胸躍らせて講義に臨んだが、いささか期待外れの部分も残った。事前の情報入手に更なる努力が必要と感じた。しかし講義をする機会を頂いたことへの感謝と喜びはこれらの不都合な状況を差し引いても余り有るほどであった。ちなみに聴講学生の大半は女子学生で、男子学生はわずか数名であった。講義時間を20分ほど超過してこの日の授業を終えたが、視聴覚機器や自分のラップ・トップ徒周辺機器を忘れない様にしまい込み、スタッフを呼んで確認して貰った後、教室を出てキャンパスの広い道路に出て歩いていると、キャンパス内の移動に運行されている電気自動車が通りかかり、そのうちの数

人の女子学生が Professor と声を掛けてくれた。後ろ向きに座っている彼らに向かって手を振り答えた。授業に参加した女子学生農地の数人であった。これも対面授業で得られる「人間関係」の良いところである・情報機器がいくら発達しても、直接会って話をしたこともないのでは相手がどのような人かを知るのは難しい。メールでやりとりするのも良いが、メールは時々誤解を招く様な事を引き起こし、送信した本人の意志と異なる誤解が返って人間関係を悪くし、情報のみを信じ切って行動するととんでもない犯罪に巻き込まれる。犯罪の多くに、見ず知らずの人間とネットでのやりとりだけで犯罪を企てる輩が消化や責任逃れにネットを利用する犯罪が多いのもこうした事に起因すると筆者は考えて居る。なぜ調節対面での講義をする大学と言う場所があるのか、情報機器で全てがまかなえるのであれば建物は要らないし、直接顔を合わせる必要も無い。しかし上記に記述したように、直接顔を合わせてコミュニケーションをとることで祖の会話や相手の仕草、人格の深さ、考え方、思いやり、品格など情報機器だけでは得られない多くの要素を直接対面することで把握、熟知することができる。人間関係の基本は相互理解と相互信頼である。騙したり盗み取ることを考える人間が嫌われるのは至極当然である。また合意の元で確認した一般常識からかけ離れ、いとも簡単に約束を破る、無視する、従わないと言う挙動、行動や態度では社会から孤立するのは当たり前である。オンラインはオンラインでメリットはあるが気温的に人間関係を深める事への寄与は直接対面ほどではない。新たに人を知ると言うきっかけにはなるがそれ以上に人間官営を深くするというプロセスに移行するまでには「時間が掛かるし、貌を合わせて初めて「がっかり」と言う今までのイメージを棄てなければならぬ等の事態にも遭遇する事にもなりかねない。久しぶりに対面講義の機会を頂いたことに対し、大学に精一杯の感謝を表したい。以下に授業中の筆者と聴講学生の状況を示す。今少し加筆強調したいのは情報機器の発達と普及で、授業の形態、および聴講する側の姿勢がかつての状況と著しく変わって来つつある。上記の様に多くの学生は授業に出ると言うのに何も持参しない。極端な言い方ではあるが、持参するのはスマホだけである。重要と思っているのかどうかは分からないがメモはスマホカメラに収めることでメモを取ったと考えて居る様である。大学は人間を育てるところであり、教員を祖の責任を感じ、いい加減な講義はできないし、アカデミックな知識の供給のみならず、人間としての基本的あり方、ひとときわ高い一般常識を備えた人材の育成と彼らを社会に輩出する野が役目と考える。情報が溢れその選択にも苦勞する。良いところだけを集めればと言うが、どの分が良いかを見極めるには全体を見る必要がある。その中から何処が問い所かを見極めることができる。また大学の教員の知識に勝る知識を持っているのなら、わざわざ大学に来る必要は無い。確かに大学が定める、あるレベル以上の能力を示せば問題は無い。具体的には講義に必ずしも出席する必要は無く、能力の証明にはc 中間試験と期末試験がある。必ずしも講義に出席する必要はないが教員によっては講義への出席率を評価に入れている教員もいるから。やむなく出席すると言う学生も居ないわけではない。ふしだらないい加減な講義ではとてもリードする大学には慣れない。一時的には逃れられても、いずれかの移

転で学生からも不平、不満が噴き出し、大学のランキングも決して上がらない・教員個々の「意識改革」が早晚必要であることは過去の例から容易に予測できる。大学の希望する学部、学科、研究分野に定められた期間在籍して卒業できても、それが自動的に就職までを保障する物では無い。むしろそれ以上に自分で何をすべきかを探す事が大切である。学生の多くは所定の期間専攻した分野で指定された単位を修得すれば、あたかも就職もできると考えて居るようである。しかし大学での履修証明はその学部、学科を卒業する為の最低限のものであり、自分の希望を叶えるものではない。そうした最初の基本的教育が極めて必要かと考えて居る。



久しぶりに英語での対面講義中の筆者



International College の聴講学生